

〔翻刻〕 飯富雅介師所蔵 『高安流仕舞附 天・地・人』 (三)

飯塚 恵理人

先号に続き、「人」冊の三二曲を翻刻する。凡例等は全て前号と同じである。『高安流仕舞附 天・地・人』の翻刻は今回で完結する。

(表紙)

高安流仕舞附 人

(目録)

弦上	一	芦刈	二	小塩	三	松虫	三
千寿	四	祇王	五	春栄	五	盛久	八
・藤渡	十	国栖	十一	楊貴妃	十二	咸陽宮	十三
・邯鄲	十五	鐘馗	十六	照君	十六	猩猩々	十七
大瓶猩猩々	十七	七騎落	十七	禪師曾我	十八	雷電	十九
・葵上	二一	葛城	二二	船橋	二三	黒塚	二三
飛雲	二五	船弁慶	二六	葛城天狗	二八	大江山	二九
・野守	三一	俊成忠度	三二	小鍛冶	三二	現在鶴	三四

(131) 《弦上》
 出立・次第同前。師長謡。(尤) 脇地返に名乗足有。脇能の時は名

乗足。常は下二居。師長も耆・式尺後に引。「此君と申ハ」と可諷。尤連四人(或ハ二人)立向所前の如シ。脇答拝し、一足引、師長差声謡。脇「末に見へたる」と右へ披き、踏廻り、師長「過れば後にはや成」と向合。道行同前。本着也。廻賦。「是成塩屋」と大小の中を見。「先かう御座」と師長に会釈。師長脇座に行、床机に掛る。連行キ、次ニ脇行。《山姥》の如し。角掛下二居。太夫出、謡済、【連】下二居と立。(太夫の方を見。)耆足出、案内乞。但太夫ハ床机也。連姥太夫と問答のうちハ離し、連姥立と見、問答。太夫「仰尤」と云時見。「お宿参せふ」と謡済て、下二居。太夫「いか成御方」と云畢て、正面角掛、「此君」と諷。「大雨ふる事」と太夫に向。(但他流ハ「夫よりして」を脇謡故、「雨の大臣」と太夫に向。尤「此君」の前、詞無キモ有。)太夫詞有。答て立、左へ廻り、笛の上に行。琵琶を両手にて持。(持様習有。)師長の前に行、中腰にて渡す。撥の持添様有。(但ハチハナシ)渡し畢て、左へ披き立、座に帰へる。尤右へ廻下二居る。大夫「引さゝれて」と向。「いざく板屋」と放し、「何とてもらぬ」と向。「思ひよらずも」と立。師長の側に行、中腰にて琵琶受取り、膝立【替】直し立。「たまわれば」と太夫の前に行、中腰にて

渡す同前也。左へ廻り、座に行、下二居、放す。後無構。師長入はに「馬上に」と入事有。脇ハ不構(入)。【後】濟【て】脇より段々入。

(132) 《荳苳》

始め《山姥》に同じ。狂言云云相濟、末の連の右の膝角に角掛、下二居る。太夫出、「是ハ此濱の市に」と見、「出はや」と立、壹足出、問答。「露ながら」と放し、諷濟見。問答。太夫「あれに見へたる」と見る所【を】(に)【見】(向)。「あらふしぎや」と太夫【に向】(を見)、「古哥を引く」と、太夫来り、脇をさそひ、角掛出、三四足。「目の前に見へたる」と指廻す所を見。「あれ御らんせよ」と向合、其儘座に帰り、下二居る。諷濟、連女と差居、問答濟立。太夫の方に向。問答過、太夫、連女の方へ行を見送りながら、下二居。「それかし追付」と立。連女「いや人々の」と見。中腰に成、「さあらハ御後より」と下二居。角掛【て】「木陰にまといして」と太夫を見。廻賦有。物着の内、狂言云云有。濟て太夫舞台二入を見、廻賦云。論義。連女の文句也。「さす盃や」と見。轉・曲舞尤放す。【末ニ】廻賦有。舞不見。連女入。脇ハ諷濟て入。舞の後、無構。

(133) 《小塩》

出立同前。次第・名乗・道行、常の如し。但連三人也。答拜過、○(○差聲) 謡ながら踏廻り、「花桜」と立向也。尤初立向所五尺斗也。廻賦過、座に行、下二居。太夫出、小謡中の打切に見。返しに立、一足出、問答。但脇正面に向立。「貴賤郡集の」と見る也。「実々妙なる」と角掛、「九重の」と向。初同打切に放し、「近頃面白き人」と見。

「大原や小塩の山」と放し、謡。「今所から」と見。「名残小塩」の打切に下二居。中入迄可見。廻賦有。《海人》の如し。待謡例の如く、居ながら也。後太夫出台に入と見。「今日こずハ」の打切に放し、舞過終迄可見。後別義なし。

(134) 《松虫》

出立同前。名乗所、太鼓前通三四尺斗(出)。尤柱也。答拜過、座に行、下二居。太夫出、諷濟時、角掛(立)。壹足出、指謡。「寄くる人」と太夫を見、問答。「今ハ秋の風」とあふきを披き、太夫の前に(側へ)行、「身をすれば」と酌をす。但せぬも有。言合次第(也)。「たとひ暮るとも」の打切に下に居。中入迄(可)見。廻賦、狂言より掛。間の謡例の如く(○居ニテ)○謡。太夫出見。問答。轉より放す。切見る。後別義なし。

(135) 《千寿》

出立、平礼(左折)・白鉢卷(色入)・厚板・直垂上下(但込大口)・少サ刀・扇子(色入)・腰帶なし。重衡先に立、次に脇出、太鼓座に寛く。重衡床机に掛くると立。太鼓の通四五尺斗出、名乗る。但柱より也。答拜濟、笛の上六七尺上に角掛、下二居。太夫出、「いかに」と云時立、謡ながら向、一足出。「披露申さふするにて」と又角掛、下二居る。重衡「しらずけふもや」と立、三足斗出向、下二居。手を下颯。「畏て候」と左へ披き、立戻り、右へ踏廻り、太夫を見、問答。「重て申さふ」と始の所に行、下二居。手を下ケ、「御誂」と言。「よし御憚り」と手を上げ、「只此方へ」と膝立直し、太夫に向。「其

時千寿」と又膝立替、座に行、下二居。(初同の留に) 二度目の地の留に、扇を抜き持、立。二・三足出、謡。「樽【の】(を) いだき」と、重衡に向、中腰に成、左の手を酌にそへる。「千寿も」と扇をたゝみ(帖ミ)、下二居。「夫くいかに」と太夫に向。「其時千寿取あへず」と放し、「只今詠じ」と又向。「聞人迄も」と重衡に向。「只末世の」と太夫を見。いろへに立、本の座に行、下二居る。角掛、「角て重衡」と連に向。「実重衡」と離し。但始、輿掛出る事も有。習多く有。置鼓も同前。

(136) 《祇王》

出立、名乗所同前。(但、置鼓有時は習有り。) 答拜過、左へ抜き、踏廻り、橋掛リニ行。(但長短可心得。) 尤太鼓の通りに立て案内を乞詞済て、脇座より三尺斗下り座す。少し角掛居。太夫出、台ニ入と居ながら見。問答。「祇王御前」と連女を見、「佛御前」と太夫を見居。中入(但中入也。問シヤベリ有。)(物着はず) 中入後、「嬉しや」と見。(轉前ニ舞有。式人ニ而舞。) 轉^ら放し、連女入て太夫に向。○(○問答) 【佛御前老人ハ舞候へ】と謡過、問答。【舞^ら不見。後別義なし。(但廻賦有テモ。)

(137) 《春采》

出立。名乗様。子方先に出。脇座に下二居。其外《千寿》ニ同じ。「某別而いたハリ申候」と云畢て一足引。「召うと」言、答拜し、狂言呼出シ、廻賦済、《千寿》の如ク座す。太夫出、狂言来、廻賦有。太刀かたなの事を言付、角掛、太夫台ニ入と立、謡ながら向、問答。

【物の隙^ら】と(立)、子の右の方に行、【(済、台真中正面より八九尺手前に出、子を見。下二居シカ^く)。扇子を抜き、子たつと、扇の骨の間^ら太夫を見する。(ひとへ身にて)「あれ成者」と子に向ながら扇を畳、後へ引。「彼者は師宗」ト左りへ踏廻り、本の座に行、右へ踏廻り、脇正面を見。「最前の人」と言。太夫諷と見。(何とて) 壹足出。「ヤガテ」ニ引。問答済、初メの【如ク】(所)に出、下二居、静に謡。「かへるさを」と立、子の側に行、中腰にて子を引立、台端をひとへ身にて、脇正面の方へ連行、右へ抜き、太夫にむけ左の手にて子を突出し、左へ踏廻り、座に行、角掛、下二居。「種直も春永も」と太夫を見。「実持へきハ」と子を見、両(片)手にて潤る。

(袂をぬらしけり) 太夫・連脇一同シラル。謡過、太夫に向、「や。」と角掛見。「何と申そ」と立。壹足出、「扱は某」と後へ二足斗引、下二居。太夫に向、問答。「夫ハとも角も」と離し、「急(イ)て」(腰を引きたて、子方へ向。)(来迎の)と子を見。【扇子にて指。上端にて扇を差。「爰ハ東路」と立○】、(○左ノ手ニ而差し、「所ヲ思ふも」と立て) 子を連、小鼓前通り、台端^ら五六尺斗手前に置、(一寸ト下二居)。(膝立直し)、(立後ニ五・六足引、下二居。) 太夫に向。(扇ニ而) 右の手にて指。又膝立直し、座に立戻り、右の肩をぬき、太刀を持、「聞ふのちまた迄」と立、右へ廻り【子のうしろに行ながら、太夫の袂を見。又子の袂を見。】(太夫の袂をみ込。又子方の側へ行。子方の袂を見込。)(「ニタ度花や」の「ふ」の字に掛(字ニ、脇壹足出デル事。)(「喃しづまり給へ」と連謡。(但素袍上下。右の肩^カぬき、少サ刀指。文を持、差上、謡ながら出。「早打」ト踏止メ。)(「すハ又早打」と正面を見。右の足を踏込、「おそし、きれとの」と、太刀を抜

かざす。「早打、長き階掛の時ハ此謡の内に歩ミ寄。」「扱春榮殿は」と早打を見。「あふ嬉しく」と早打の方へ身を直し、太刀を指ながら、柱の本に行、下二居。文を(右ニ)請取、(左ニ持)柱を四尺斗、角掛出、中腰にて文を披き、(是よりさらりと)読ミニツに折。「有習。」(文見様)、尤太刀ハ下二置。「早たすくるぞ」と太刀を持。(春榮諷済テ立。)子方右の後ろへ(走り)行、引立て左へ披き、座に行、角掛、下二居。太刀を置キ、肩を入。(但行、其儘下二居。太刀を置、肩を入。扇を持、角掛ル。)廻賦有。太夫物着の様成る事有。(但居ながら少サ刀指も有。)其間放し、済て向、問答。「嬉しく」と扇子を指、太刀を(とり)、右に持、子の前に行、太刀を見。両手にて下二置(足遣イの事)、扇子を抜開キ、「猶悦」と酌をし、膝立直し、太夫の前に行。酌し、「伊豆の三嶋」○(○)の神風も吹き○。と角をとり、(左り足踏込。左り足ヲ引、其儘正面ヲ廻り。)左へ廻り、本の座に行。(角掛)踏込。(イク久)ト角を少シ差ス。披、「嘉晨」と拍子を一ツ踏。左右し留、下二居。(但扇の持様、習有り。)春榮来酌をす。受る。又太夫も酌をす。同前。詞有。舞離し、「東路」と見。「又ハ兄弟」と立。子を連、太鼓前通り、柱を七八尺斗前に子を置、後へ引。「三嶋の宮」と礼をし、「親子兄弟」と子を連、柱を越ると、手を放し、先に立入。尤早打ハ文を渡し、切戸より可入。

(138) 《盛久》

出立・名乗所同前。脇の次に太刀取出。打鳥帽子・調度掛・厚板・側付・大口・少サ刀指。右に太刀を持。次に輿舁。出(立)始に有。太夫脇の先に出。(但太夫、輿舁出。小鼓の前に立居も有。金春(観

(四)

世)ハ名乗なく、直ニ太夫うたふ。笛の上に床机に掛るも有。其時ハ太鼓座に寛く。尤寛す名乗る。太夫真中に立居。(金剛流也。)連脇ハ橋掛に中腰に成居。名乗答拜済と太夫謡、掛ると向。中腰也。「めんく東山」と連の方へ膝立直し、ひとへ身にて見る。太刀取裏の方へ寄。(イツカ又)ト輿舁太夫に掛る。正面に出、中腰にて謡。脇も太刀取も後ろに付、同前。「いつか又」と立時、各々同前。道行極りなし。(観世「瀬田」ノ邊ヨリ廻り橋掛へ行。)句当次第也。尤脇は右・左に付事也。(習有。)'早鎌倉に着にけり」と、脇太鼓座に寛く。太夫は座に行、床几に掛る。輿・太刀取、太鼓座【五、大小の後ろに】ニ寛く。太夫「夢中」と謡出。(観世流ハ是有。【又「いかに土屋殿」ト幕も有。】言合。)'かわる世なれや」と立。柱を四五尺斗(出)、角掛出。「あらいたわしや」と言。済て太夫の方に向、式足斗出、「いかに申」と言。「さん候」と謡なから出。中腰。但一足。「近寄寄て御物語」と云畢て立。大小の真中通に下二居。問答。「全く命の為」と立。太夫の右の方に行。中腰ニ成、経を見。「種々諸」と謡。「かなしけれ」の打切に【膝立直し】(たつ)、大・小の前二三尺先に、正面うけ、下二居。謡済と立ながら一足出(《野守》の足遣イ)。「すでに八聲」と言。「御最期の」と太夫に向。問答。「足弱く」と輿を掛る。(但脇「すでに」と云出すと、太刀取こし掛、階掛に出ル。)太刀取ハ、太鼓座に正面うけ居る。「後の世のかどでなるらん」の地返に廻る。太夫、大・小の前立。(《武士前後》と小鼓方向、式・三足出テ、「ロウヨリ」トシテヲ見。「由井」ト正面ニ向、「急ケリ」ト壱足出テ、次第ニテ脇座ニ行。「扱て」と謡。)脇は太鼓座前通、柱を七・八尺斗先に出、正面向。「さつて油井」と言。「數革しかせ」と

太夫を見。「早【く】(々々)直り給へ」と左の手にて真中台端より四五尺手前をさす。太夫謡ながらなをる。太刀取は廻り、太鼓座に又寛く。(但輿掛ハ、太鼓座(ヨリ)切戸ニ入。)

脇「舗革」と太刀取、太鼓右の方に、中腰にて太刀を左に持、太夫を見居る。「まちければ」と立。うしろに行見。「聲の下よりも」と踏込み、太刀抜かざし、「御経のひかり」と太夫の左右へ(右へ)太刀を捨る。尤右の方より捨る。(口傳)「こわそもいかなる」と正面に顔を上。謡済、左へ披き、笛の上より切戸ニ入。【「こわそも」と】(イヤク何ヲカト)太夫ヲ脇見、問答。「あら有難」と(二三足後ニ引。)中腰に成、打切に立。「急ぎ御前に」と【太夫向合。入替り、脇座より】(角掛、二三足出テ、「御使度々」トシテノ方へ一足出。「鎌倉殿へ」ト脇座へ戻ル。)三四尺下り、角掛下ニ居。物着の内放す。(但上掛ハ此内ニ廻賦有。)太夫台ニ入を見。手を下、(角掛)、「御前」と言畢て手を上向。問答。轉より離す。(是ヲ見)論義に向。「いかに盛久しばしとて」と立、一足出。(《野守》の足遣イ。)
「御簾の」と始の所を見、下ニ居。(左右ノ心得。尤足遣イと同様。)手を下ケ、「命ハ千秋」と扇を披き、酌をし、本の座ニ帰り、下ニ居、向語る。「一ト年小松殿」と角掛、【夫ハ茸狩】(「唯一トさし」と)と向。舞放し、「酒宴半」と向。「退出」と放し、後別義なし。(物着。廻賦有事も有也。)

(139) 《藤渡》

出立同前。次第・名乗・道行、常の如し。連、素袍上下・少サ刀。三人。(或ハ二人。)立向所五尺斗。着廻賦有。太刀持、答エ済、座に

行。床机に掛。(但連、名乗の内、廻賦の内。二度共ニ中腰。)太夫出、台ニ入と見。(謡。台ニ入。シヲルト会釈。)問答。「住はてぬ」の打切に放し、「海にしづめ給ひし」と向。○(○シカク)角掛語る。

「浅ミを能知りすまし」と向。「盛綱」と脇正面に離し、「あの海」と左へ披き見。「扱ハ其者の」と向。「あれに見へたる」と始めの所を見。「死骸をハ」と向。曲舞放す。会釈由断あるべからず。「同じ道になして」と太夫来る時、左へ身を披、右の手にて留る也。(習有。)(床机ヲはづし、ひとへ身ニてもよし。して側へ来らず時は、其儘無構事。)太夫下ニ居ると身を直し、謡済、廻賦有。問の諷、大小掛と立向謡。(但立時、左へ披ク。連ソレヲ見立。)太鼓打出し、角掛合掌し、聲合聞、謡済、座に戻り、下ニ居。太夫出、「うしや思ひ出し」と見。問答。「去にてもわすれ」と離す。「彼の岸」と見。後別義なし。(別ニ習廻賦有也。)

(140) 《国栖》

出立、放し髪・法被・厚板(色入)・大口・太刀・腰帶・扇(色入)。一聲越て出。先へ天皇・輿舁式人(但出立前ニ有。)台真中。脇ハ大鼓、右の手通り、天王五三尺斗下り、各正面見て謡。(天王ニテト。アシライ)道行「雲井に帰へるべき」と踏止メ、「頼をかけよ」と天王を見ると、座に行。天王床机に掛ると、輿を放し、太鼓座方切戸に入。脇は後に付、天王五六・七尺斗下り、角掛、下ニ居。太夫出、「そもやいか成」と見。居ながら問答。太夫「姥に談合」と云畢て放し、「同しく供御」と見立。側に行、扇を披き、うつすを受、両手に持。(シテ、ワキノ側ニ来リテ、扇子ニウツスマアリ。受ル事。)立

「ジ(マ)エンサイ」ト立ち、天王の前に行、中腰にてそなへ、「間ぢかくまいれ」と膝立替、太夫を見。又立直し天皇に向。「尤太夫を見る時、膝立替る内に扇子を畳。」又扇子を披き、両手に持。謡済、太夫の側に行、立ながら「只今の」と言。「尉にくださるゝ」と中腰に成。太夫の披きたる扇の上ニうつす。「習有。」○(○)膝立直シ、太夫ヲ見。中腰ニテ、「イカニ尉」トウタイスマ、太夫ノ前ニ行。扇子ニウツス。(角掛立。五・六足出。「吉野か国栖」ト踏止メ、少シ幽エンシテ静ニ天皇ノ方ニ向。二・三足出、一足引、下ニ居。頭ヲ不下。扇ヲタ、ミヒザ間進ク立直ス。ヒトエ身ニナリ、シテヲサス。又元ニ直シ、扇ヲヒラク。ヒザヲ直シ、シテニ向謡。「御事」ト立。スルノトシテノ側へ行、ウツス。扇ヲタ、ミ、二・三足引、下ニ居、「そモ」ト謡。) 済て本の座に帰へり、角掛下に居。「たのもしく思召され」と幕の方へ向。急キ立、耆足出、「あら笑止や」と言。太夫答済て、太鼓座に行。大小のうしろに入。「舟引おこし」と笛の上ミち出、始の座に行。「曇なき御命」と天皇を見。轉に角掛(トメ、アシライ、又角掛)「有難やさしも姿」と○(○)アシライ。「実貴賤」角カケ、「世にわ住がたし」アシライ、「されバ」角カケ「心ざし」アシライ) 太夫を見。【「君子善」と角掛却て「たすくる」と太夫に向】(「身ハ十善」の打切ニ角カケ「いかにしてか此程の」アシライ)。「三吉野なれや」と放し、角掛。後無構。

(141) 《楊貴妃》

出立、放髪。唐元結。(但唐冠法被ニテモ。バサラ、四十以下。コンモヨキ。十六・七以下、四十以上、赤金入)(金入の類。)厚板。側

次。大口。扇(色入)。縫紋腰帶。始め、作物大小の前に出有。(尤太夫人出るなり) 次第・名乗・道行、常の如シ。着廻賦済、太鼓の前に行。狂言を呼出シ、二云有。済、左へ踏廻り、柱方四・五尺斗静ニ出、差謡。「漢宮万里」と右へ披。「長生離山」と二足出、【左り】(右へ見廻し、立廻り、「あらうつくし」と作物迄見廻し向。作物真中の上を見。「おしへのことく」と云。「思ひ候。」と座に行、下ニ居。(大夫)「むかしハリさん」としづかに居ながら作物に向。「あら恋し」と立、一足出、問答。「玉の簾をかゝけ」と引廻し取る時ハ中腰に成。(但「梨花一枝」の打切ニテ取モ有。又「実や六宮の」と取モ有。イツレニモ取ル時下ニ居ル。) 謡済、手をつき、「勅定の趣」と言。手を上て、「扱も后宫」と云。手を下けて、「只是君の御心さし」と云。「御形見の物」と手を上る。「玉の筭取出し」と太夫の側に寄、扇を披き、請取て扇に乗せ、「口傳アリ。」(前ヲ向ニむけ。) 跡へ引、下に居ながら、「いとよ」と云。(尤手を付居ル。) 地の内、太夫会釈時、顔を下る。「さらばと言て」の打切に立。「供ない申」と座に行事五・六足。「よしさらばし」と立戻り、下ニ居、手ヲつく。「其かざしにて」と太夫の側に行。筭を右にて取渡し、扇を畳、座に戻り、下ニ居。轉より不見。会釈可心得。舞過(に)見。「しるしの筭」と側に行、扇を披き、請取乗せて、「暇申て」と跡へ引。手を下、其後立。階掛松の先送行。「去にてもく」と立戻り、下ニ居。手を下、「浮世なれ共」と立入。(但上掛は脇座の方へ行。「去にてもく」と向。下ニ居。「うき世なれとも」と立。太夫の前通り入ル。)

(142) 《感陽宮》

出立同前。但少サ刀指。連同じ。始に大小の前台大屋躰出ル。大夫
禮序にて出。次に連女。(○アマタ)。其次連脇太臣。立烏帽子・狩
衣(赤地)にて出、三人台ニ上る。女、脇座より次第に並居。大臣脇
正面太鼓の前通、柱より八九尺斗上並居見。(尤地の方を見居る。)太
夫大臣と問答の差^サ濟、一聲越て出。階掛一ノ松の本にて幽延し、立戻
り、連と向合謡。(留ノ一句ニ名乗足。ツレ角掛居ル。【正面に向】
(角カケ諷。静ニ踏廻り、「思ひの」、《野守》「暫ノ足ツカイ。)、
右にたつと、又連に向(合)。「やたけ心」の打切に、正面に(角カケ)
向。「遠山の雲」と左へ少シ披き、道行し、裏の方へ(二ノ松辺ニ。)
着也。着足有。廻賦有。「いかに泰武陽」と連に向、答濟て入替る。
(幕ノ前ニ脇立居ル。連柱の本に行。狂言云云。畢て来り、脇と問答。
(但連狂言ト云云の内放シ居ル。」「大法ならバ」と少サ刀を左の手に
て披渡ス。「尤泰武陽狂言ト云云有。ウラノ方へ寛ク。狂言太臣の前
ニ来り云云有。「最前の人」ト泰武陽立向ふ也り。連両手にて請取、
始の所へ行。狂言に渡ス。「旁も給(わ)れ」と狂言云云。答て裏の
方に寛キ、連も少サ刀を抜狂言に渡ス。(但柄を右にし、刃を手まへ
にす。」「狂言請取台ニ行を、「のふ又」と脇呼掛る。(急キシテ柱ノ元
迄行。連は脇のうしろ(ヲ通り幕ノ方へ行。角掛立居ル。))へ行、狂
言云云濟、(二・三足後へ引)、静に(一の)松の本【に行。】(ニテ
角カケ)「角くて荆軻」と云。「儀式に随ひて」とひとへ身に成。「雲
上はるかに」と脇座の方を見。連謡と身を直し、「荆軻ハすでに」と
足遣イ有。(習。)(静ニ下ヲ見。裏ノ方へ行。二足斗。「三里が問登り
(○足ヲ止メ)行ケバ」(一足アシツカイシテ止ル)但連も正面うけ
謡。「後に立たる」と脇を見。「のぼりかねてぞ」と一足出、右を引、

下ニ居。(二・三足斗り一ノ松ノ方へ出、【ヒトエ身ニナルモアリ。】
ヒザヲ折リ、下ニ居ル。)(平座ナリ。脇「あふ」と言ながら立戻り、
(此時急ニ踏廻り、二足斗一ノ松ノ方へ出デ、ヒトエ身ニナル。躰ヲ
直シ。」「実理り」と扇を指。「さしも」と連の左へ行。(ツカくト)
手を取、引立る。(二・三足跡へ引、踏廻り、静ニして柱ノ方へ行。)
「ゆるしけり」と立向、扇を抜持、正面に離す。其内に謡濟と、大臣
謡ながら立。女の次に行並居。「武陽荆軻」と謡ながら台に入。太鼓
の前通り、柱九尺斗上。太夫に向、手を下ケ、中腰也。「先泰武陽」
と扇を披き、台の前に連行、中腰にて扇を見する。(尤両手ニ而持。)
其儘膝立替、台の左角ヨリ二尺斗放れ、中腰にて向。手を下げる。
「其時荆軻」と扇を披き、始の如シ。台の前に行、見セ、膝立直シ、
本の座に帰り、手をつき居。「すでに立のき」とはしり寄、太夫の右
の手に組付。連は左也。下に【引】すへ、右の足を台^カ下し、首上^カの
所を左の手にて取、台の間に釧有るを引出し、胸にさしあつる。(飯
塚注・【書き添え一行分墨消判読不可。】この付近に符箋あるも、符
箋のコピーが抜け落ちており、判読できなかつた。)連は扇と手くび
を持。「いかに泰武陽扱」と釧を下し問答。「尤連ト也。」「さあらば」
と又釧を胸にあつる。(尤太夫を見て、)(此辺ヨリ面・釧共ニ次第ニ
下ゲ、ネムル也。曲之内ニ三遍キノ音。シテ習在。ワキカマワズ。)
「しらめをあらためて」と言あたりち、うつむき【ねむる心也。】連
も同前。【釧も下ける。】「御衣の袖を引切て」と左右へたをれ落。
(連は笛の上^カ其儘ヲキ、切戸ニ入。)脇は(釧ヲフリ直シ、)台の右
より(飛)上り、前へ飛下り、【身を替、釧にて付廻し、脇座に行。】
(真中ニテシテト打違、脇座行、踏廻り、)釧振上(釧ニ目ヲ付、左

手ヲ下ケ) かざし、(次第詰ニ) 太夫階掛に居るを見。【劔をうしろに隠し】(柱ノ先迄行。尤) 柱より【三尺斗上へ行。】(諷ナカラ、「ケイカワ」四足後へ引。劔ヲ直シ、「イカリ」) 身を(替) 踏留。「いかりをなし」とかざし、両手にて投る。【「御門又」と左へ】(静ニ踏廻り、笛ノ上へ行入ル。「止りけり」) 踏廻り、笛の上より切戸ニ入。(口伝有。)[観世掛りハ、切謡チガウ。能々言アハスヘシ。]「劔ヲナグルバカリニテ」ハ謡アマルナリ。)

(143) 《邯鄲》

出立同前。少サ刀なし。輿舁式人。例の通り。階掛長短に寄べく。「ト村雨」の打切に出。始め太夫出、作物脇座に出有。「ふしにけり」の返しに台の上、枕の側を扇にて二つ打。(返シ「フシニケリ。」) 膝立替、真中に下り、手をつき、「いかに」と謡。「心地して」と膝立替階掛輿舁ヲ見。「玉の御輿」と太夫台を下るを、輿かくる。正面に少し、太夫出る。「上エ人」と下に居ると、輿をはづし、太鼓座ヲ切戸ニ入。脇ハ太夫のうしろ、少し右の方に寄、立居。太夫下ニ居ると笛の上ヲ切戸に入。(キタ流は太夫下ニ居ルト直ニ出ル也。) 礼序にて子方出、次に連大臣三人(或ハ二人・耆人) 出立如例出。脇正面太鼓前通、柱上に並居。始メの如し。(六傳「たとへば」)「不老門の前」と左へ披き、初メの大臣斗立。真中に出、手を下ケ、問答。「国土安全」と膝立替、扇を披き、子の側に行。酌をし、又膝立替、本の所へ帰り、下ニ居る。正面にうしろを見せぬ様專一也。「百官脚上」と子立時、同しく立。すらくと台の次に行、下に居。後別義無。(但輿舁階掛ニ例の如くまち居。「心地して」と脇見ると立。静にしての側

に行、かくる也。)

(144) 《鐘馗》

出立同前。名乗所大鼓の右の手通り。答拝過、一足引。打切て道行諷。「海路」と右へ出。「よる程もなき」と座に行。謡済、太夫呼掛ると向。一足出、問答。「草虫露に」の打切に下ニ居。中入迄可見。廻賦。まち謡例の通。後太夫出、「寶劔光」と見。切迄後別義無。

(145) 《照君》

出立、名乗所同前。但少サ刀指、答拝し、座に行、下ニ居。尤例ハ四五尺下り居る。少角掛、太夫出。謡済、床机に掛ると立向、一足出、問答。(但階掛ニ而太夫する時は、《天鼓》の如く、謡の内ニ(立)行。「先夫へ御入候へ」と本座に行、下ニ居。「いかに」と其儘【見】(言)。「ちりかゝる花」と放す。中入に脇も入。(習有。)

(146) 《狸々》

出立・名乗所、同前。但少サ刀なし。答拝過、一足引。大小打掛、謡済て、座に行、下ニ居。太夫出る。台に入と見。舞離シ、過ルと切迄見。但乱の時はいろく習有。後別義なし。

(147) 《大瓶狸々》

出立・名乗所、同前。答拝し、座ニ行、下ニ居。太夫出、一聲謡と見。立、一足出、問答。「琴詩酒」の打切に下ニ居。中入迄見。廻賦常の如し。まち謡例の通。後太夫出、台に入と見。後別義無し。

(148) 《七騎落》

(黒頭・半切・太刀の替有之。師ヨリ承ル。) 出立、扱烏帽子(左折別)。平札。白鉢巻。厚板(色入)。大口。法被、肩上げ。少サ刀・弓矢持。始太夫連数多出。「別れそあわれ成りける」と謡済て、船を階掛ニ出ス。松の本也。一聲一段にて出。裏の方も胴の間に乘。(口傳アリ) 正面うけ、一聲謡。狂言「磯打浪の音までも」と言畢て、太夫謡掛ると向、問答。「言語同断」と正面に向。「自害せんと思ひつゝ」と弓箭捨、左の足【**五**】(を)引、刀に手をかくる。「尤中腰也」「何と君ハ」と顔を上、太夫を見。「扱ハそれがしが」と手を放し、立、問答。「心得申候」と言畢て裏の方も下る。(尤) 狂言脇の後口の矢を此時とる。言合置べし。脇は扇を抜持、台ニ入。太夫連立出、大鼓右の手通りに出。手を下げ、礼し、手を上、太夫に向云云有。「いて土肥殿」と中腰に成、「引出物」と太鼓座に行、子方をつれ、右の方にかこい、柱も四五尺斗上に連行、「見せけれハ」と身を披、太夫に合する。手を放シ、始の所も下り座ス。(但此時して連の次に行事も有。)(可言合。) 太夫「御物語候へ」と云。「畏て」と云。「尤手をつかず。」正面に向語る。「御子息遠平」と太夫に会釈。「爰こそ」と直ス。「君の御為」と頼朝に向。手を下ケ、「土肥殿」と太夫に向。手を上げ、「嬉しなきの」と立、子方(△頼朝・連)の次に行。下二居、角掛、「月の盃」と酌をする。脇もうくる。(尤脇斗也。廻賦有。舞不見。後別義無。(太夫入り替ニテモ、又末座ニテモ。切、上掛り替ル可心得也。))

(149) 《禪師曾我》

出立、同前。但太刀佩、長刀をかたけ出。仕手連数多付出。始、して連中入有。太夫出、名乗、狂言云云有。【台】(作物) 脇座ニ出有。太夫台ニ上ると、一聲越て出。階掛松の側、正面うけ、一聲謡。して連も同じ。謡済頃、長刀を卸し、右に立持、一足引(左ヲ出シ)、名乗。「押寄候」と云畢て、柱の方へ向。(一・二足出。)(「是ハはや」と云。尤見合、一・二足可出。其儘にて案内を云。狂言云云の内、披き居。「何事」と向。「心得て候」と云畢て、右へ披き、連を見。(右アトヒキ) ひとへ身にて、「はやかさどつて」と云。正面に離す。「いかに祐宗は」と見。太夫寛きの内放ス。(但「かさどつて」と云畢て放し、床机ニ掛、太夫「抑」と立事も有り。)(「抑是ハ」と見。「心得給へ」と(左アトヒキ) ひとへ身に成。「切て(右) 出れば(左)」と二・三足後へ引。(「手ごろに寄てあやまち」右ヲヒキ連ニ面ツカイ) 【射】(打) とれや」と(身ヲ直シ) 連に会釈。裏の方へ一・二足引。前を連通る。(右足手打込引キ。)(「思ひゆるすも」と長刀を両手に取。(フリ上ケヒネリ、「源六」ト止り、一足立。長刀ヲ後へ戻シ、面遣。身ヲ直シ。太夫の側へ行ながら振上、(「ソノ外我もく」) 合せ、取直シ、又合其儘にて上下にて五・六度合ながら後へ行。階掛迄行、石つきをつき、廻飛。中腰にて振上まち、○(○長刀後へ振り、一同ニ石突ニテ、シテ連ヲ留ル事。面ツカイ。直ニ身ヲ直シ、)「今ハ是迄」と長刀かいこみ、小鼓の前に行立。太夫台も飛落ると、連立寄引れ行を、長刀にて附廻し、柱より三尺斗先にてかたけ、(正面ニ面遣イ。直ニ柱の方へ向キ。)(仕留拍子踏入。(習有。)(観世ニ【脇なし。】(アリ。)(宝生ハ中入後斗脇有。切ノ仕方違ふ也。云合べし。上掛わ脇なし。))

(150) 《雷電》

出立角帽子(鍛子)。小格子。着流。水衣(緋紫黒無用)。珠数(常の通り)。金扇、腰帯(鍛子)。連僧式人(常の如シ)。名乗所、真中少し右に寄、連柱の本に居。中腰也。答拜過、座に行、床机に掛る。連次に居る。太夫出、不見。「深更に」と角掛、「いか成松の」と脇正面に直す。「余りの事のふしき」と太夫を見。「ふしきや扱ハ丞相か。早此方へ」と床机を離し、一足出。「稀人」の打切にてさそひ、踏廻り、座に行、下二居、見る。「あふせと是を」と、右の手にてなく。手をおろし、「御身は筑紫」と云。「秋におくる、老葉」と角掛、太夫謡と見。「習有。」「折節本尊の御前」と正面真中通を見。「おとつて」と扇子を指す。「扉にくわつと」と中腰に成。「もへ上る」と立。「酒水の印」と珠数を右へ取直す。「口傳」「烟りのうち」と太夫を見。返シに身を直し、其後入。後二畳台脇座(の前)ト脇正面とに出有。出立、小格子(或ハ白綾)。紫衣(或ハ緋)。角帽子(金ラン沙門)。掛治金入腰帯。金扇。平形珠数。大小の前に寛き、扇指。(但鼓打掛無キ時ハ幕内ト扇子指出る也。)(言合次第。)脇座の台に上ル。(尤台の後、左の足ト)中腰に成。「扱も」ト云。「座し」と珠数をかけ、さらくとしづかにいのり、「押揉て」といのり留。「俄に晴て」と上を見。「去ハ社」と直し、「所に」と膝立替、静に階掛迄見。「いかつちの姿ハ」とひとへ身に成。問答。「奇特なれ」と立いのり、「か

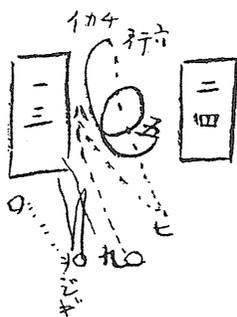


図1

みなりなる」と祈切。(図1)脇正面の台に行上り、正面向いのり、「梨壺・梅壺」と台の後より下り、太夫とうしる合に一廻りし、座の台の側迄行、「廻合て」と振向、太夫を見、側へのり寄。「もみ合く」と後へ引。「おつかけく」と太夫後へ引に付行。大小の前にて中腰に成、合掌し、立戻り、座の台、脇正面の方に向。腰かけ、太夫に向。「御門は天満」と立。少し出、正面向、中腰にて「天神と贈官」と手をつき、「嬉しや」と立。座の台の次に下二居。後無構。「習口傳アリ。」

(151) 《葵上》

出立、頭襟。捌き髪。房袈裟。中格子(或ハ色無厚板)。大口。少サ刀。平形珠数。扇色入。(但替珠数懐中ス。尤習口傳色々有。)始、神子出。連大臣、太鼓座に寛き、神子座して、常の通りに出。名乗、答拜シ、神子ト五尺斗下り、角掛座し、神子に向。詞有。角掛居。太夫出。神子問答。「若か様の」と会釈時、神子に向詞有。太夫には無構後放す。「うちのせかくれ行ふよ」と太夫、太鼓座に行と、狂言呼出し云云有。狂言。(〇はし掛に来り)案内乞と幕を上、静に正面うけ出。(尤長短ニも習有。)(「九識の」と謡。(出ニ直角・角)「案内申さん」と(一・三足後ニ引)狂言に向云云済、二云云(狂言「お先へ参るへし」と行。))正面に放し、狂言連大臣の詞済、台ニ入。大臣其儘立諷。脇会釈詞有。「あれ成」と大臣、正面を見る。脇も同前。「そと加持」と脇へ向可応答。其後大小の前ニ寛き、扇を指。右に珠数を持、鼓打掛る。「習有。」「(頭ラ聲)膝立直し、正面向立。出【し】衣ト四五尺斗前にて衣を右の方ト左へ見廻し、(衣、頭ヨリ中ヲ見。)真中

へ見返し、顔上〔習有〕衣の側により中腰にて謡。〔習色々有。〕「赤木の珠数」と右の手を上見。〔ニンニク〕ト珠数を上げ。〕「平形」と左に掛いのる。切て又「東方」といのる。「なまくさ」と太夫右の方うしろに來ルを見、立向いのりながら、中腰にていのり、太夫立と、同じく立。五段・七段の祈也。上掛・下掛ニよるべし。言合第一也。留、きぬを太夫取らんとするを、両手にて押ゆる。〔此間習・口傳有。〕「行者の法力」と又珠数を掛立、座の前にて祈る。〔習足アリ。〕「うんたらたかんまん」と太夫の側により、後へ引、又太夫後へ引時追行。「即しん」と右の手にて壺ツ打。〔金剛ニワ口傳有。〕足を引。ひとへ身、中腰。〔足遣イ口傳。〕〔ヒザヲツク。〕「どくじゆの聲」と〔左へ披き、笛の上へ行。角掛、下に居。〕〔立、神子の次へ行。下ニ居。〕神子の次に【大臣】〔ワキ、其次大臣。〕扱脇可入。

(152) 《葛城》

出立、大格子・水衣〔ヨリ紐〕、其外同前。連二人〔同ジ。〕〔但始ニ作物大小前ニ出モアリ。〕次第・名乗・道行、常の如し。立向所五尺斗、尤本着也。廻賦有。「あら笑止」と正面少し高ク見。「是成岩陰」と座の方を見。「晴さはや」と連に会釈。答済て座に行。太夫呼掛ると向、一足出、問答。「肩上のかさには」の打切に離し、「帰る姿」と角掛、《三輪》の如く右へ立廻り、「柴の庵」と大小の方へ一・二足出。太夫に向、「心得申」と踏廻り、座に戻り、下ニ居。太夫寛ク。其うち放し、出、謡と向。居ながら問答。中人迄可見。廻賦・待謡常のことし。但座に立謡。連も同前。太鼓聲合に角掛、合掌し、「一心敬礼」と云。連ハ其儘下ニ居。脇言畢て放し、下ニ居。後太夫出、謡

と見。舞放し、「高間の原」ト終迄見。後別義なし。

(153) 《船橋》

出立、次第・名乗・道行同前。但立向所七八尺斗。半着也。廻賦。連の答済て、座に行、下ニ居。太夫出。〔喜多流は太夫ヨリ掛ル時立。一足出テ〕「二河の流」と見。返しに立。一足出、問答。「所ハ同じ名」の打切に放し、「渡りを通らてハ」と向。詞有。語ニ下ニ居〔語ル。尤〕脇も下ニ居。中人迄見。廻賦。問の諷、常の如し。居ながら連女謡と見。朔り放し、済と見。終迄後別義なし。

(154) 《黒塚》

出立同前。但水衣〔コン〕。〔八丈嶋ニ而も。〕連壹人。始作物大小の前に大夫入り出有。次第・名乗・道行、同じ。尤連も正面に向。脇より二・三尺程下り謡べく。立向所六七尺斗。名乗て向時踏まわらず。〔廻ル。〕本着勿論也。廻賦。連答済、座に行、下ニ居。太夫謡出すと静に向。「あら定めな」と立、壺足出、問答。連も同前。「異草もまじる」の打切にて、下ニ居。〔但其前して下ニ居るならハ、其時下居。〕連同前。初同のうち、ワクカセワを脇正面に出ス。謡済、輪クを見て、「いかに主ジ」と言。「何と申す」と太夫に向。○〔御見せ候へ〕トはづし居。〕太夫輪の側に行。可会釈。○〔〇サシワ其儘可謡。〕「さあらバ頓て御帰り」と云畢て放し、「喃くかまへて」と見謡。太夫放すと脇も同前。廻賦。「それかしもまどろむ間、汝も夫にて」と云畢て○〔〇はづし〕、扇・数珠取替、扇、額にあて眠る。〔習有。〕〔扇の事〕連同前。狂言立あかり、或ハ跛時、二人とも起〔ワキ斗也〕、

「汝ハいつ方」と云。「まどろミ候へ」と言畢て、又二人とも眠る。狂言せきはらひなとし、板なとうつ時、又式人(ワキ)とも起、「近頃噪き」と言畢て、【二人共に】(ワキ)眠る。狂言来り、「シカくく」云と起。式人共膝立、扇・珠数本の如く、取直し「かう渡り」と、連に会釈。(狂言立ト脇正面エ向。狂言人ト連ニ向、扇ヲサシ、数珠取り替ル也。)答済て立。作物右の角に行。ひとへ身にてノゾク。連は二尺斗り下り、作物に向。(右ヲ踏込、左リヲ入レ、座ノ方ヨリ、次第ニ上ヨリ下へ見込。)脇身を直しながら、「ふしきや」と言。「数しらず」と(左ヲ引)、右の足を引(下ヲ見)。「軒とひとしく」と上を見。「膿向」と身を直し、(笛座・脇座正面。足の事。左少シ笛後へ引。右アグ打。脇座正面向。)[腑臑]と下を見。「爛壞」と正面の下を見。「いか様是ハ」と顔を上、「籠れる鬼」と作物をひとへ身にて見。連謡と身を直し、「心もまどい」の打切にて、正面に向。「行べき方」と二足斗出。(《野守》の通巻足出。)[足に任せて]と(五・六足後へ引き)脇座に走り行。(習有。)(足の事。)大夫、早笛にて出、謡と向。【扇を指、】(一句間キ)、【珠数】を拵る。連同前。「当りを拂て」といのり出す。(習有。)(柱巻の事)(柱巻、飛、下二居。祈リグワシテセメ、立祈り、其後橋掛へ行。)五段・七段始の如し。太夫作物の角に飛、披く時、中腰にて合掌し、「東方」と謡。連同前。(尤ウキノ左ニ付祈。此時右ノ方へ付べし。)太夫立と脇も立。「せめかけく」と太夫後へ引時附行祈り、「伏にけり」(習有。カタヲ打ニテテ無。手ニテ押ト心得ベシ。)と一ツ打、中腰に成。(【《葵上》の如し。】)(「扱」後ヲ見。「こりな」仕手ヲ見。)[「今迄は」の返しに立、座ニ行、下二居。「あさましや」と太夫来る。可会釈。(連は「たかま

ん」と祈、座に行、下二居。)

(155) 《飛雲》

出立・次第・名乗・道行、同前。但水衣(ヨリ緋。)(紺紐ニ而モ)。連同じ、半着也。廻賦。連答済、座ニ行、下二居。大夫出、詞有。其時向立。老足出、問答。「いろくを四方に」の打切に下二居。中入迄可見。柱を越ると眠る。《黒塚》の如し。狂言人と式人共起、角掛、謡ながら出。「あらた成ける」と扇を指。珠数を掛、合掌し、「南無や」と云。「力を添て」と祈。「ふしきや」と幕の方を見。「あらわれ出る鬼神の姿」と祈り寄。後○(○同前。)(《黒塚》の如く、太夫後へ飛ひさると合掌し謡。「鬼神の通力」より連は座ス。脇ハ座に戻り、立見る。「珠数さらく」と又祈寄。「即心成佛と祈ふせ」と階掛迄付行祈。切直ニ立戻り、太鼓の前にて振返り、「ふしきや今迄」と云。返りに座に行、下二居。(但他流は太鼓の前通りニ而祈伏、脇座へ行とてつり返り、「ふしき」と云。)金剛ハ柱巻にて打上、脇の謡。(金剛ハ動キ習有也。)

(156) 《船弁慶》

出立同前。子方先に立出。連脇、平札。白鉢巻。厚板。大口。側付。少サ刀。扇子。【式】(三)人、脇の次に出。次第《山婆》のごとし。「扱も我君」と名乗のうち、子方に会釈。「然れ共我君」と直し、答拝し、「頃は文治の」と立(廻り)、向合。尤連ハ名乗の内其儘立。判官謡時、脇も連も中腰。「まだ夜深クも」と立。道行常の如し。本着也。廻賦有。「此所に」と判官に会釈。子、座に行。次に連ならひ行。脇

ハ四五足行、右へ踏廻り、階掛、太鼓座の前にて狂言呼出し、云云、
左へ踏廻り、(直ニ太鼓座へ寛き、)太鼓座ニ寛き、珠数を懐中し立、
右へ披き、柱より三尺斗【出】、角掛(出)、「正敷静」と云畢て、
左へ披き、真中に出、子を見、中腰に成、手をつき云云。「畏て候」
○(○正面ニ直シ)「頓て静の屋に」と●(●諷ながら立も有り)膝立
直し、階掛に行。(松の邊迄行)太夫を呼出、【問答】。「夫ハとも角
も」と踏廻、連の右の膝の角に行。手をつき、子方云云有。「畏て」
と云畢て、手を上、膝立替【飯塚注…書き添え墨消判読不可】、太夫
台に入て、「此方へ」と云畢て、角掛(居)。太夫「返すくも」と
向時、應答。「浪風も」の打切に放す。謡済、子方「いかに弁慶」と
向。手を下げ答。「実く是は」(顔ヲ上ケ)と扇を披立。「行末千代」
と太夫の側に行。「静にこそハ」と中腰に成ながら、扇○(○の手)
に左の手を添る。太夫謡と扇置、「折節是に」と立。左へ踏廻り、笛
の上に行。烏帽子を持、「尤頭の方ヲ左【ヲ】(ニ)持。」立、太夫に
向、「是を召」と謡ながら側に行。中腰に成、きする也。《自然居士》
の如し。(【是は前折。】)済て本の座に行、下ニ居。舞過ト見。「仮
の宿り」と子床机より離れるを見る。(おじぎ)「御別れ。見る目も」
と太夫を見。柱を越ゆると放す。狂言来り、廻賦有。畢て、狂言太鼓
座の次に下ニ居ると立。階掛の方へ三四足出と(大鼓前邊迄出ると)
初の連向立。「いかに武蔵殿」と云。立戻り向合。問答。「一ト年渡辺」
と正面に披き、「今以テ同じ御事」と連に向。「急ぎお舟」と階掛のへ
踏廻り、行。(正面真中ニ出、踏廻り、「お舟を」ト云も有り。足の事)
狂言に「お舟を出し」と言。「立さわぎ」と柱の上ニ一・三尺斗幕の
方を見、踏止ル也。(足の事)。「ゑいやく」右へ披き、後見座に行。

中腰に成、扇を指。珠数を右に持。此うちに船を狂言持出、脇座の前
ニ置、判官乗。(尤床机かゝる。)胴の間の次に始の連斗○(○乗ル)
狂言、「皆々お船に」と言時(立)、左へ披、胴の間に乗。(左の足も)
角掛、下ニ居。狂言廻賦有。「習有。」「いかに船頭」と【狂言を見】
(其儘ニ而)。「風が替て」と言畢放す。狂言波頭ニツめに立、左へ少
し披き、「あの武庫山」と云。「此御船」と舳先を見。「皆々心中」と
連を見。「何事」と言ながら角掛ケ。「あふ暫ク」と連を見。(連の方
へ右足ヲ踏込。)云畢て放す。「いやく此者」と(其儘ニ而)狂言を
見。云畢て放す。波頭壺つの内、右へ見廻し、幕の方を見。「あらふ
しぎや」と云。「いかに弁慶」と子に向、下ニ居、手を下ける。(「悪
逆」ト頭ヲ上ケ、珠数ヲこしらへ、又元の如ク直シ居。「主上」ト正
面ニ見込。次第ニ脇正面へ見廻し、「見へたる」と单身ニ而、幕の方
ヲ見込也。)(「一門の月卿」と珠数を拵へ、「波にうかみて」と幕を見
る。(尤ひとへ身なり。))太夫出、脇にも会釈時、「習有。)(立、左
り足ヲ踏込。)(「弁慶押へだて」と左の手にて押ふ。(習。口傳。)(「打
物わざ」と子を見。「珠数さらく」と祈る。(足ヲ先ニ直ス。)(「悪靈
次第に」と祈りとめ、狂言ニ詞有。角掛、立居。(仕手ニ向立居。)
「追拂」と右の手にて一つ打。(《黒塚》の祈伏同様也。)(ひとへ身)
(元に直し)「祈りのけ」といひる。「後白波」と祈止。角掛下ニ居。
○(○仕手ニ向立居。「成りにけり」幕の方へ忝足出ル。流れ込の節、
舟の中ニ而、忝足あし遣の留メもあり。)(判官も次第に舟へ下入。(習
色々有ナリ。))

(157) 《葛城天狗》

出立同前。但房袈裟金入也。連九人(或ハ七人。)出立同前。袈裟常の通。次第・名乗。道行、前の如し。立向所、六尺斗。始作物、大小の前に出有。廻賦有。「いかにかた〜」と始の連に会釈。言畢て座ニ行、下ニ居。(尤平座也。)太夫(出)、無構。「寥〜たる」と向【合】(あふ)。「尤〜」と膝立る。(連同前)中人迄可見。間無構。「山河草木、と角掛、扇を指。珠数を右ニ持。「心乱る〜」と階掛の方を見。「ふしきや」と立。「両眼月日」と一・三足祈る。連同前。「此時いわはハ」と祈留。「大石左右へ」と作物を見。「役の行者」と後へ二・三足引、下ニ居。連同前。「大天狗」の打切ニテ放ス。後別義無。(習口傳有。)

(158) 《大江山》

出立同前。連九人。何も始の如し。一聲越して出。「雲も行成」と名乗足有。差謠「又名を得たる」と始の連、正面に披き、謠。「有時の」と其儘立向。道行本着。廻賦云。太鼓の方を向、狂言呼。(但狂言は連の後ニ付出る也。)二云云濟、留りの連右へ踏廻り、次第に階掛へ行。左へ披き、裏の方へ角掛向。中腰にて寛く(まつ)。狂言云云濟来。「此方へ」と云。脇を立並、言畢て、座に行、下ニ居。太夫は大小の前に出居る。太夫の方を向、問答。中人迄可見。「いさ〜酒を」と酌する事も有。「なれてつばいハ山伏」と太夫(来)、脇の肩ニ手を掛る事有。(習有。口傳。)太夫人と狂言呼云云。中入す。後出立、黒頭。鍬形。白鉢巻。法被肩上ケ。厚板唐織。太刀。右ニ松明を持。作物出ると見合出る。「太夫人出。脇座也。」幕離し、松明二ツ振。右へ披き、松の本迄出。正面うけ、松明一ツふり、「既に此

(159)

夜」と謠。尤連、捌髪・白鉢巻・替大口・太刀・厚板也。「空猶くらき」と松明を左の肩ニ寄、上を見る。(口傳有)松明を捨、中腰にて右の方を戸を開く。「見ればふしきや」と立。「鬼神のよそふい」とひとへ身にて見。「兼而期したる」と正面披き、「南無や八幡」と中腰にて手を下げ、「頼光保生」と連を見渡し、後へ引、床机に掛る。「劔をとばする」と皆太刀を抜かざす。始の連斗台に入。(習有)柱を三・四尺斗出、太刀をかざし、問答。「土も木も」と正面うけ、「あますな」と階掛を見、不残台に入。脇正面の方に五人。大小の前に四人。(尤入時習有)働きの内、始の連、沓ツ切違、付て廻り、笛の上より切戸に入。跡の連、一同に左右より切違ひ、附て笛の上より入、脇の方へ仕手来を見。床机を離、裾を拂ひ、直に向、切違ひ廻り、中腰に成。太鼓打上、「頼光・保昌」と謠、「より光か手なミ」と台に入。切違、下手に組、一廻りの内さし通し、二重台の下ニ平座に組伏せらる。「頼光下より刀を抜て」と太刀を右の方に拔出し見。中腰に成、「差通し〜」と式つ突。「刀を力に」と【右】(左)へ太夫をはねかへし、上を飛越、沓ツ切、附廻し例の通留る。仕方色々有。但太夫により組可替。言合第一也。

(159) 《野守》

(大格子)・出立同前。尤房袈裟、常の白綾地也。水衣(ヨリ)、老人脇也。次第・名乗・道行、例の通。但始作物、大小の前に出有。本着。廻賦。畢て座に行、下ニ居、太夫出。小謠。「夫ハ明州」と向。返シに立、沓足出、問答。「先是によし有け」と正面真中を見。「是ハ何と申」と向。「立寄れば実も」と始見たる所を見。尤一足出べく。

「むかしの我」と太夫を見。太夫語、下ニ居る時は、脇も下ニ居、立ながら語る時は、脇も立居。「扱こそ箸鷹」の打切に下ニ居、廻賦。狂言⁵掛。待謡なし。大小掛ると扇子を指。珠数を右ニ持、作物の方へ四・五尺斗出。中腰にて「有難」と謡。尤小鼓打掛る也。「祈けり」と珠数を掛、合掌し、「我年行の」と言（「見せ給へや」グワシテ）「南無婦依佛」と一トいのり祈る。畢て立、左へ披、座ニ戻り、下ニ居。太夫作物にて謡と見。作物⁵出る【と】（時）、中腰にて可見。問答其儘。「暫く鬼神」と立ながら一足出。（足遣イの事。）（口傳有。）「法味に」と珠数を掛、「押もんで」と祈る。（習・口傳アリ。）（カニ足の事。）「東方」と角掛合掌し、下に居。「明鏡の宝」と鏡を太夫持来渡す。（又前ニ置事も有。）（其儘置、後見可取。請取時ハ右の方へ可置。）尤扇子を持入也。

(160) 《俊成忠度》

出立、直垂・厚板・別烏帽子（左折）・白鉢巻・少サ刀・扇子（色入）右の後腰に、矢に短冊を付指し、老人脇也。尤俊成座に床机に掛る。太刀持、笛の上に居。階掛、松の本にて【正面をう】け、名乗。答拜し、一足引、台に向。案内請、俊成と太刀持問答の内放し、此方へと言時向。台に入。真中に座ス。尤俊成の方に向。「志籠に短冊」と腰の矢を抜、左に持、俊成の側に行。中腰にて渡す。膝立替、本の所に戻り座ス。「いたわしや忠度」の打切にて、笛の上より切戸に入。後別義なし。（但、俊成を脇にてする事も有（ト言傳）。宝生ハ脇、切迄居ル。）

(161) 《小鍛冶》

出立、掛直垂。厚板。大口。（少刀。）折烏帽子。始大臣名乗。但《小原御幸》の如し。答拜し、踏廻り、階掛入口にて脇を呼出ス。「いかに此内」と幕揚、（二・三足ツカ〈ト出。）謡ながら出、「宣旨にて」と中腰に成、手を下、問答。（口傳アリ。）（去リナガラ）ト頭ヲ少シ上ケ「何ト仕」ト又下ゲル。「トニカクニ」ト少シ上ケ、「赤面」ト下ル。「兎にも角にも」（ト少シ上ゲル。）の打切に、大臣座に行、下ニ居。脇は（カヘシニ立行。）真中、大小の前、三・四尺斗出、下ニ居。正面向、「夫のミ頼む」と大臣に向。「せんじにまかせ」と中腰にて、手を下げ、受。（静ニ）膝立替、脇正面柱⁵六尺斗（下出、角カケ）上ニ出。（静ニ）「是は一大事」と云。「祈誓申さばや」と笛の上、四・五尺斗上りて行。太夫呼掛ると向、問答。「壁にみゝ」の打切に下ニ居。（クリ・曲、例の通。）「傳ふる家の」と太夫指時、手を下げ、「下向し給へ」と（迄下ケ居、「カンカ」ト頭ヲ上ル。）手を上げ、問答。（「待タマエ」ト中腰、「夕雲」ト直ス。）中入迄見。柱を○（○太夫）越すと角掛、立入。（雷聲。静ニ頭ヲ三ツ位。後ハスラ〜。）後、二重台【正面】。真中（台）端に出有り。出立、風折・長絹・（扇）・少サ刀さゝず。出様（習有）。大小の前に向、中腰にて、扇子指すと小鼓打掛る（立所習有。）（頭ヲ壱ツ声立ツ。）（猪、中腰ニテ諷。彦右衛門か言ニ、中ゴシニテ諷時ハ、「願白ハ」ノ返シニ下居。「サアラバ」ト中ゴシ。何レニテモヨシ。）台に左より上り、下ニ居。幣の捌有。（右ニテ取り、眼向ニテ左ヲソエ、紙元迄右ヲズリ上ゲ、右ノヒザニクシヲツカエル。）「宗近勅」と云。「さあらば十方」と中腰に成。「カラを合せて」と幣捌き有。「幣帛を（上ゲ）捧」と（開キ

スグ)一ツ振。「天に(上ゲ)仰き」と(開キ、静ニ左へ廻シ、「タンセイ」マデ)又一ツ振。○(是迄ニ右の方へ戻ス。「キキイレノヲ・ジウセシメ」下ゲル。)左右し、向ふへ返し、「せしめ給へ」と(真向ニ上ゲ)、両手にて指上、「(キン上)」「再拜」と戴き(右ニ取テ又左ニラク)幣捌有。(左右)右の方に置。台より、笛の上六・七尺上に角掛、下ニ居。(立ちテ後ニ向、カタヌク。直ニ角掛居ル。)(扇ヲ持)太夫出、「いかに宗近」と見。勸離。「三拜の膝」と見。手を下げ、「御劔のかねハ」と立。尤働の内に(立)、【地の方ニ】向。右の肩をぬく。(扇ヲサス。)台に左の膝斗上、槌を右、劔を左に持。(劔ヲ真向ニ上ゲ、ツチニ目ヲツケ、)鉄台にて(ハツタト)一ツ打。太夫(「ド」)一ツ打。又一ツ(「ドウ」)打。(太夫「下ド」)又打。(打、「重」ト又打。又打。)(「打様、口傳。」「天地」と上を見。「角て御劔」と上を見て見。(真向ニ上ケテ見。「ヲビタ、シヤ」)「表に」と銘の所を一つ打。(口傳有。)(習。)返して太夫にうたす。其儘にて渡し、(柄の左リ又自前。)(習。)台をはなれ、左へ踏廻り、本の座に行。(カタヲ入、扇ヲ持。)(角掛、下ニ居。「氏の神」と見。手を下ケ、後離ス。「小狐丸」と太臣に太刀を渡す。両手にて請(但前に置もす。)(取、右の方に置、(但前ニ置時ワ不構。))放す。脇より先に立入。(但中入ニ習有也。)

(162) 《現在鶴》

出立同前。太臣同じ。「実々聞は紀伊の国」と正面披く。「是朝敵」と大臣に向。「萬代」の打切に、台に入。《小鍛冶》のごとし。尤正面に向。(習有)曲舞済、大臣「宣旨に任せ」と向。手を下ケ受、膝を立替立、中入す。大臣も入。後二重台、脇正面に出有。出立、平礼

【烏帽子】・白鉢巻・単狩衣・太刀佩、弓矢ヲ持。猪野隼太、打烏帽子・調度掛・袴・厚板・大口・少サ刀(木刀)、平胡籙せおふ。(作り様習有。)(左の手にて劔を持。一聲越て出。幕離れ有。松の本にて正面受謡。連も同前。「召ぐしたる」とひとへ身にて見。(脇モツレモ、一同ニ向ふ也。))台に入。柱より三・四尺斗出。(踏止メ、幽エンシテ脇座へ行、幕ヲ見ル。して出ルヲ付ケ、見タシテ)「雨風」と角掛、上を見。「すはや時節」と座ニ行、角掛中腰也。連は笛の上四・五尺斗上に行、胡籙を置、角掛居る。(尤中腰也。)(「黒雲一村」とひとへ身にて太夫を見。連同前。「南無や八幡」と角掛、礼し、矢の手に弓を取添、膝立替、披き、左の肩脱。(習有。△)(△ト正面ニ向。弓矢、一同ニ右ニ持。弓を突、頭ヲ下ケ、「祈念して」頭を上ゲ、してニ向く。)(弓に矢をつかい立。「化生の真中」)【と放し、弓の先を卸し、下ニ居。又一筋を】(矢放ツ也。射、弓ヲ返し、右ノ手ニテ一ノ矢ヲ取。)(つかふ。「さかさまに落ける」と連(立行)両手を披き、(しての側へ)はしり寄、棹へはづし(正面角掛、左ヲ立。右ヲツ。直ニ右ヲ立。左ヲツ。脇正面ニ向。《土蜘蛛》ノ通り飛也。手ノ事。直ニ立。)(【又右の手にて取はづし、膝立替】追行。階掛にて捕、引倒し、少サ刀抜(一ノ刀・二ノ刀・三ノ刀九刀)【三刀】さし、さやに納メ、【左へ角掛】(後見座ニ来り)、手を下げ、待脇【「一ト刀、二刀」と】(連ニ付、シテ柱ノ元迄行。踏止メ、連ノサス時、横ニ取り出デ、見止メ、「弓矢ノ家ニ」ト一同ニ右ニ持。正面ニ二・三足出デ一足引。)(弓矢【を左右に持。太鼓の前あたり迄はしり寄。】(幽エンシテ、角カケ止メ拍子ニツ也。ケレ。)(【弓箭の家」と正面向キ、矢に弓を取そへ、披き、放し、留の拍子二つ(踏)。弓矢を取分持入。)(口傳数多有。【本文

ニ平札、白鉢巻ト有。】

(奥書)

天保九戊戌(一八三八)春於東都写之豊後岡藩中

大神性阿南惟英主人

付記

貴重な資料の閲覧・翻刻を御許可頂きました高安流脇方飯富雅介師に心より感謝申し上げます。本稿の作成に当たって御教示を頂きました寛敏一師、データ入力に協力頂きました平成九年度飯塚ゼミ卒研究生の中島淑恵さんに心より感謝申し上げます。なお、本稿は平成一〇年度文部省科学研究費助成奨励研究(A)「東海地域能楽資料の収集と整理」(課題番号・〇九七二〇三二六)及び平成一一年度梶山女学園大学研究助成(B)による成果の一部となります。